慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	限界効用理論の擁護
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1934
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.7 (1934. 7) ,p.989(23)- 1029(63)
JaLC DOI	10.14991/001.19340701-0023
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340701-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

らくは、世界經濟は未だ姑らく此二途の間を彷徨しなければならぬであらう。

（一九三四・六・二〇）

限界效用理論の擁護

氣賀健三

一　序論
二　理論的法則の確立
三　函數關係と因果關係
四　目的概念と因果概念
五　純粹經濟學
六　效用概念
七　主觀的價値と價格

一　序論

限界效用說は、前世紀の第四分の三期に於て初て歐洲學界に其發展の强固な基礎を置いて以來、今日に至るまで可成りの年月を閲して來た、其間該學說が受け來つた所の非難攻擊は實に多方面に亘り、其學說の殆どあらゆる部分に及んで居ると言つても過言ではない。或は全體的に或は部分的に、或は拒絶し或は訂正せんと試みた學者は之

を枚擧するに暇がない程である。而して反對派の人々から猛烈な攻擊が加へられると同時に、他方に於て當該學派に屬すると自ら稱する人々の仲に自から意見の相違が生ずるに至つたのも無理ならぬ次第であらう。現今一般に墺太利學派瑞西のローザンヌ學派、英國のケムブリッヂ學派及び亞米利加の制度主義學派と呼ばれて居る所のものは、何れも皆相等しく所謂る限界效用說に其起源を持つものであるが、此等の諸分派はそれぞれ或固有の立場、又は獨特の解釋を備へて居り、或意味に於て互に對立して居る。

が併し筆者の觀る所に據れば此等の諸分派には大體に於て特に限界效用說一般として特徵付けられ得べき共通點が二つある樣である。其一つは、該學派が其發生當時歐洲の經濟學界を風靡して居つた所の歷史學派に對して反動的立場を採用せる點である。換言すれば歷史學派は方法論上に於て現實主義的歷史的方法を採るが、限界效用說は之に對し抽象的孤立的方法に據るものである。歷史的研究を尊重するの餘り純理論的研究の價値を殆ど全く輕蔑し去らんとした所の歷史學派に對抗して、純粹理論的絕對主義を力說した所に限界效用說の重大な特徵があるのである。此の謂はゞ方法論の特質は實に限界效用說に存在理由を與ふる根本的事由である。然るにも拘らず、其諸分派の間に不幸にして必しも完全な一致が備つて居らぬ。勿論個別的、歷史的研究を排斥して一般的、理論的研究をば經濟學の性質として承認するといふ漠然たる方法論的主張に於ては確に共通點を認めることが出來るのであるが、斯くの如き研究方法の理論的意義、換言すれば學としての經濟學の內容を構成する所の法則の論理的性質如何に關しては、諸分派の間に些細ならざる意見の相違が在る樣に見受けられる。第二の共通點は何であるかと言へば、それは言ふまでも無く、價格形成過程の說明手段として限界效用の觀念を利用することである。此第二の謂はゞ價値論上の共通點は前の第一の特徵に比較して一層正確且つ一般的に限界效用說の各分派に當嵌るのであつて、此等各派は殆ど例外なく此觀念を採用して居ると言つて差支へない。

茲で一應注意して置かねばならぬことは、限界效用論者が常に必しも價値論上の主觀主義者たることを意味するものではないといふことである。限界效用說は其初めて唱導された當時に在つては、其以前に勢力を有して居つた所の客觀的價値學說に對抗せるものとして意義を有し、價値の主觀的要素を極力强調するものであつた、從つてそれは主觀的價値學說の代表であり、同時に客觀的價値學說とは氷炭相容れざるものゝ如く想像されたのである。併し研究の進步は最近に至つて、此兩學說の間に根本的對立の介在せざることを證明するに至り、マーシャルの比喩を藉りるならば兩學說の論爭は恰も鋏で紙を切る際に其上刄が之を切るか或は下刄が之を切るかの議論に類するものであるといふ見解が漸次勢力を占むるに至つた。

而して吾人も亦、既に他の機會に述べた如く、(註一) 限界效用說が決して單なる主觀的價値理論に止まるものでなく、價値決定の要素として客觀的要素をも同時に包含することを認めるものである。

註一　三田學會雜誌二十八卷一號昭和九年一月、拙稿參照

之を要するに、現在の限界效用說の共通的特質は大體上述の二點であるが、其中、先に擧げた方法論の方面には唯、歷史學派に反對するといふ消極的共通點が在るのみで、諸分派自體の方法論的主張の間には相當の隔りがある。殊に、時の經過に連れ反動的性質を薄くするに至つた現在に在つては、寧ろ其方法論上の差違が反つて激しい論爭の目標となる傾さへあるのである。然るに價値論上の共通點に關しては殆ど異論がないと言つてよい程である。即ち限界效用の觀念は、該學派に屬する如何なる人に依つても用ひられて居る。唯、相違ありとすれば、方法論上の要求よりして其利用の仕方に相違があると言へるであらう。

此結果として、限界效用論者が其反對派の人々に對して取る態度に自ら一定の共通性が生れて來る。即ち其方法論に關する限りに於ては、效用說諸分派と反對派との間に共通の對立が在る譯でなく互に入亂れて議論を交へる有樣であるのに、價値論に關する限り、效用論者は何れも皆殆ど同樣の論法を以て反對派の效用說非難に答へて居るのである。

今吾人が此論文に於て明にしたいと望むことは、限界效用說本來の學的意義即ち其方法論的特質を明にし、且つ之に基いて、效用價値說の眞隨を明にする即ち從來效用說に對して浴せられたる誤れる非難を拭ひ去ることである。

二　理論的法則の確立

先づ方法論的規定から始めやう。

限界效用說は理論經濟學を研究する方法として、抑、如何なる種類の方法に據るべきであらうか。吾人は、當該學派の創立者の一人たりしカナール・メンガーの方法論的主張こそ正に其取るべき道であらうと信ずる。メンガーの主張とは即ち理論經濟學が理論的嚴密科學たる可きことを要求することである。メンガーは研究の方法をば歷史的並に理論的研究方法とに分け、前者は現象の個別的性質、個別的關係の認識を目的とするもの、後者は現象の一般的特質、一般的關係の認識を目的とするものと爲した。後者の方法を採用する科學即ち理論的科學はメンガーに依つて更に二つに分たれる。其一つは理論的研究の經驗的現實主義的方向であり他の一つはメンガーの所謂る嚴密的方向である。第一の方向に依る研究は、其結論として現象の、經驗的法則、一般的傾向を齎らす。斯くの如き研究に依りて吾々は現實上の通則、大體の傾向に關する知識を得ることが出來るが、嚴密なる理論的認識は之を獲得し得ぬ。嚴格なる理論的認識は第二の嚴密的方向に依據する場合にのみ之を獲得することが出來る。嚴密的方向の根本的命題はメンガーの言葉を藉りるならば次の如くである。

「縱令ひ唯、一回の場合にのみ觀察せられたことゝ雖も、正確に同一の條件の下に於ては常に必ず現れて來るものであること、換言すれば本質的には同じことであるが、一定種類の嚴格に典型的なる現象に對しては、同一の事情の下に於ては、常に又吾々の思惟の法則に從つて正に必然的に、他の或同樣な一定種類の嚴格に典型的なる現象が生じて來るものである」（註二）と。

註二　C. Menger: Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften. S. 40.

メンガーの考へて居ることは、略言すれば、理論的眞理の特性としての思惟の法則の絕對的妥當性に外ならぬ。純粹なる理論的認識はメンガーの所謂る嚴密なる意味に於て、即ち論理的絕對的妥當性を示す意味に於て一定の現象又は現象相互間の關係に關する法則を要求するものでなければならぬ。斯くの如き法則的認識を樹立する爲に必要なる方法は先づ第一に現實的經驗的現象を抽象化し且つ孤立化することである。抽象化、孤立化は必然的に一定の論理的假設を要求する。

如何なる意味の理論的研究に於ても、其認識の對象は雖然たる現實的現象其物で在り得ることなく、一定の抽象過程を經たる認識對象でなければならぬ。之は今更說明を要することのない自明の理であらう。吾々には抽象化せられたる一定の現象を前提として、論理の形式に從つて推論を行ふものであるが、此前提と爲るべき吾々の知識は、嚴密なる法則の認識を目的とする以上、現象の最も根本的、最も本質的なる智識で無ければならぬ。斯くの如き知識は、出來得る限り抽象化、孤立化の方法の採用に依り「あらゆる現實的なるものゝ最も單純なる要素を求めることに依つて得られる。

現象の本質的なるもの、現實的なるものゝ最も單純なる要素とは何であるか。如何なる標準に從つて本質的、又は根本的なる特徴を定めるのであるか。之を定めるものは當の認識の目的でなければならぬ。若し吾々が經濟學的觀察を行はんと欲するならば、當該現象の經濟學的性質が即ち其現象の本質を構成するものと爲る。理論的觀察は常に必ず一定の論理的範疇（―經濟學ならば經濟學的認識なる範疇―）の內部に於て行はれるものである以上、現象の本質は、吾々の從ふ所の一定の論理的範疇の一つの具體的表現として解釋せられねばならぬ。從つて本質は吾々の依據する所の見地に從つて決定せられるものである。此意味に於て本質は現象に固有なる、絕對的性質ではなく認識主觀の目的設定に依存する所の相對的性質でなければならぬことに爲る（註三）。斯るが故に本質とは通俗的に解釋せらるゝ如き、現象の一般的なる性質、偶然的ならざる性質、現象に固有なる性質の謂であると考へることは重大なる誤解の原因と爲る。蓋し本質の斯くの如き解釋は、純粹理論的研究に基く法則概念をば、結局、現象の一般的傾向の認識に向つて努力する所の現實主義的理論科學の法則概念と混同せしむるに至るに相違ないからである。純粹理論科學に在つては本質の意義は飽くまで認識論的に決定せられねばならぬ。斯樣に解釋してこそ本質的なるものに關する法則は絕對的妥當性を具備し、當該現象の根本的基礎を明かに爲し得る資格を與へられるのである。若し本質とは現象の一般的通則に表はさるゝものと解せんか、吾人が得る所の本質的知識は、結局、經驗的、現實的な研究方法に依つて獲得せられる蓋然的認識統計的知識と何等變る所の無いものと化し終るであらう。

註三　R. Kerschagel; Einführung in die Methodenlehre der Nationalökonomie 1925, S. 66 ff

其處で經濟學の對象を決定する爲には次に論理的範疇としての經濟學的觀察とは何であるか、現象の經濟的性質とは何を意味するのであらうかを問題とせねばならぬ。吾人は此處で經濟の意義を決定する必要に迫られる。經濟とは何ぞやといふことは從來殆どあらゆる經濟學者がそれ〴〵自己自身の言葉を以て任意に說明を試み來たつたことであつて、諸學者の間に必ず見解の一致があるとは保證せられぬ。

併し此點に關する意見の不一致は決して上述の意味に於ける法則の論理的性質に影響を與へる理由とはならぬ。それは唯、本質的なるものゝ內容に相違を齎らし從つて經濟學の對象に相違を生む原因となることは確であるが、併し經濟學に於て追求する法則の論理的性質を變化せしむるものではない。（註四）

註四　其故に此際經濟の意義如何は第二次的重要性を有するに過ぎぬ。吾人の考ふる所に依れば、經濟とは人間がそれ〴〵自己に取つての幸福を可及的に增大せしめんとする合理的行動に依つて與へられる所の、人間生活現象上の性質であると考へる。人間は其幸福を增大する爲に何等かの手段に依つて常に其種々なる欲望を滿足することに努めるものであるが、其際其欲望滿足の手段は、一定社會の人間の全體の欲望に比較して稀少なことがある。然る時人間の理性的行動は所謂經濟的原則即ち最少手段又は最大滿足の原則の形を取つて現れる。經濟なる性質は斯くの如き事情の爲に社會上の諸現象に賦與せられる所の性質である。經濟學の對象と爲す所の經濟現象とは斯る性質の或る社會的形態に外ならぬ。

之まで述べ來たつた所に依つて理論經濟學に對し限界效用學說の本來採用すべき方法論的態度の一面は明であらう。即ち其態度は飽くまで歷史的現實主義方法を排斥するものであらねばならぬ。但し排斥するといふことが決して誤りと爲すといふ意味でないことは勿論である。唯純粹なる理論的認識を達成する爲にはメンガーの稱ふるが如き嚴密的研究方法が最も適當であると主張するに過ぎぬ。吾人は嚴密法則の意味をば他の學者特にシュンペーターの意見と比較することに依つて一層明確にしやう。限界效用學派に屬する一分派として、經濟學は經濟現象の一般的傾向を明にするものであるといふマーシャル流の考へ方は著しく方法論的曖昧さを含むものとして排斥せられねばならぬ。更に又、亞米利加の制度主義の如く、經濟法則に對する具體的な社會制度の影響を考慮に入れんとする

所の觀察方法は、歴史學派的研究方法に接近するものであつて、之又正統的なる限界效用學派に叛くものと言はねばならぬ。

近來限界效用學派の陣營中の有力なる一人ヨゼフ、シュムペーターも亦經濟學上の多大の貢獻にも拘らず此方面に於ては甚だしく曖昧である。

吾々は次にシュンペーターの所論を觀察して以て吾々の主張をば同時に他の方面に關しても明にしたいと思ふ。論理的推論の基礎たる可き本質的なるものに關する彼の意見はメンガー流の嚴密主義と一致せぬ。シュムペーターは法則の說明と事實の記述とが異るものではないと考へる。彼に依れば法則とは畢竟事實に其支持點を得るものであつて根本に於て事實の記述に外ならぬ。唯、法則的認識を得る爲には個々の事實の記述でなく、事實の一般的性質を觀察することが必要なのである。換言すれば「吾人は、限りない程の雜然たる性質に煩はさるゝことなく、一定種類の現象の廣汎なる類似性を觀察するのである。」個々の現象はそれ〴〵相異なつた特質を備へて居るが、「併し全體として見れば類似せる特徵の數は類似せざる特徵の數より遙に多いのである」（註五）と。

註五　J. Schumpeter; Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie. S. 39.

法則の基礎たるべき理論の出發點を斯くの如く飽くまで現實に則して解釋する時は、其法則的認識は論理上の意味に於ける一般的妥當性を要求する資格はない筈である。其認識の成果は絶えず經驗的事實に參照せられつゝ現實的に生起するものとして考へられねばならぬ。從つてそれは統計的法則と何等根本的相違を有せぬものとなるであらうし、純粹理論的法則の確立の爲に論理上當然必要なる一定の假定的前提は不必要となる筈である。

シュムペーターは「統計的法則と嚴密法則との間に何等根本的對立は存しない」（註六）と斷言する。之は彼の立場から觀るならば當然であるかも知れぬ。が一方に於てシュムペーターは事實の記述の爲に假定的前提が必要であると說いて居る。之は明に論理上の矛盾である。シュムペーターは之に就て次の如く辨明して居る「吾々が設ける所の假設は定義と同じく其自體任意なものである。確に吾々は事實を通じて假說の樹立に達するには相違ない。が併し根本に於て、假說は吾々自身の全能力から創り出されるものである。其故に其外見上の確實性は矢張り定義と同じく唯、此事情即ち吾人の全能力のみに歸せられるに過ぎぬ。併しながら吾々は注意して、假說の中に含まるゝ主張を出來得る限り僅少ならしむる樣に努力する。而して又此僅少なる主張にしてもそれは唯、單に敍述の補助手段として用ひられるのであつて決して一つの認識として利用せられるものではない。此二つの點こそは吾々の假說をば先驗的思索と區別するものであつて、それはあらゆる疑問を鎭靜せしむるに足るものであると信ずる」（註七）と。

註六　Schumpeter; a. a. O. S. 44.

註七　Schumpeter; a. a. O. S. 46.

果してシュムペーターの擧げる二つの事情は吾々の指摘する矛盾を解くに足るものと言へるであらうか。シュムペーターの考へは、吾々の指摘する矛盾をば矛盾でないと爲すものゝ如くである。換言すれば假說の有無は法則の論理的性質に何等根本的變化を齎すものでないと考へるのである。即ち前文に續けて曰く「上に述べたことは嚴密法則と統計的法則との間に本質的區別を築くものではない。何となれば、統計的法則と雖も常に一定の前提を有するものであり、而して若し前提が殆ど明瞭に現れて居らぬとすれば、それは唯、表現方法の欠如に基くに過ぎない。歴史家ですら假說なしには濟まされぬ。凡そあらゆる命題はその內容が如何なるものであるにせよ、唯、一定の前提の下に於てのみ意義を認められるのである」（註八）と。

註八　Schumpeter; a. a. O. S. 46-47.

若し假說の意味をば單に個々の記述の爲に便宜上必要な手段として解するならば、或は歷史家も亦之を用ふることがあるかも知れぬ。併し若し斯く解するならば如何なる命題に於ても前提なしでは無意義であるといふ言葉は容易に承服し難い。單なる事實の記述には假定を設けぬのが本來の主旨ではないか。

假說を設けることが決して認識そのものでなく寧ろ認識條件に過ぎぬことは、わざ〳〵シュムペーターの特筆を俟つまでもなく自明の事柄である。然も法則的認識の爲には假說は論理上必要不可缺の條件である。嚴密法則的認識は唯、一定の根本的前提の下に演繹的推論を採ることに依つてのみ得られる。若し此意味に於ける假說を承認することを欲せず、然も尙ほ說明の爲に假說を要求するならば、其假說たるや、極めて便宜上の一時的補助手段としての資格を認められのみであらう。而してシュムペーターの意中は正しく斯くの如きものであらうと推定せられる。

然りとすれば問題は次の點に歸着するであらう。即ち果してシュンペーターは統計的法則の認識を以て理論經濟學の任務と爲して以て首尾一貫して居られるであらうかと。シュムペーターは、理論經濟學の任務が經濟的數量間の函數關係を指摘記述することに在ると考へて居る。其故に此問題は函數關係の意義如何に依つて解決せられるのである。而して函數概念はシュンペーターの唱導以來現代の限界效用學說全體の公認財產の如き觀を呈して居ると言つても過言でなく、方法論上の一重要項目たる位置に在るものである。次に節を改めて論述する。

三　函數關係と因果關係

シュムペーターが理論的法則と統計的法則との間に根本的區別を設けなかつた理由は實に此函數的觀察に在ると言つてよい。併し吾人の觀る所を以てすれば此觀察法も亦彼の辨明を正當視するものとは受取れぬ。

函數的關係とはシュムペーターの定義に據れば「經濟財のあらゆる量が相互依存の關係に立ち其一つの變化はあらゆる他の量の變化を伴ふ」（註九）といふことである。換言すれば「或る一つ又は數個の經濟的數量の一定の大さに對して、爾餘の經濟的數量の一定の大さ、然も唯一種のみの大さが從屬せしめられる」といふ關係を說明すること、略言すれば「斯る依存關係を記述すること」が經濟學の職務と爲るのである。而して「若し此任務が其研究の過程に於て、爾餘の教義の重要なる命題を參照するの要なく、一義的に成遂げられ得るならば、此處に一個の完全なる經濟學說が成立する、此記述を構成する所の命題は之を經濟法則と稱し、其全體が純粹經濟學又は理論經濟學の學說を構成する」（註一〇）と。

註九　註一〇　Schumpeter; a. a. O. S. 28-29.

而して、シュムペーターに在つて經濟學の法則を構成する所の函數的關係の記述の爲には、假說は先驗的命題たる重要性を認められぬといふ論據は何處に存するであらうか。シュムペーターは曰く「吾々は因果の概念を出來得る限り廻避せんと努める。吾々は現象の「原因」に就て論ずるのでなく、現象間の函數的關係に就て論ずる。」……吾々は事實を『究極の根據』まで追求することの出來るものでなく、「吾々は唯、之を與へられたるものとして假定する、而して、吾々の教義の具體的結果が一定の相關々係から生ずること、從つて又吾々に必要なのは函數概念であつて因果關係ではないといふことを知るであらう。……函數概念が用ひらるゝ場合には如何なる場合でも、之を利用すべきであることは自明の次第である。蓋し、吾々は原因結果に就て論ずる場合よりも函數概念に就て論ずる場合に一層主張を勘くすることが出來從つて議論の餘地を尠からしむることが出來る。」（註一一）と。

註一一　Schumpeter; a. a. O. S. 47

之を要するに、函數概念に在つては、因果關係に於けるが如く事實の起源に迄溯ることを要せず、與へられたる事實のみを以て滿足することが出來、從つて後者の如く假說を設ける必要に迫られる憂が尠く、假說に依つて主張せらるゝ內容が少いといふのがシュムペーターの所信であらう。

此點に就て吾人の主張せんと欲することは方法としての函數概念と因果概念とが決して別々の相容れざる概念でないこと、而して說明の手段として、前者は後者を中に包含するものでなければならぬこと、從つて假設の要否は兩者何れを採用するかの問題とは無關係なものであること、假設の必要は函數關係なり因果關係なりに論理的必然性を與へる點に在るといふことである。

函數概念は、理論經濟學に於ける近時の常識の感がある。殊に價格形成過程の說明に數學的表現を利用することが一般に行はれる樣に爲つてからは、函數概念は殆ど大部分の理論經濟學者の承認する所のものゝ如くである。

函數概念を例に依つて現すならば或財貨の需要(N)は其價格(P)との函數的關係に立つ F(N.P) といふのがそれである。此際若し價格を獨立變數と假定すれば、兩者の關係は N＝F(P) に依つて表現せられる。需要を獨立變數とすれば P＝F(N) である。而して此過程を因果的に說明することは、決して不可能でもなければ又特別の假說を必要とするものでもない。寧ろ因果的說明の方が一層精確且つ明瞭に表現せられる。即ち F(N.P) といふことは、$N_1 \rightarrow P_1 \rightarrow N_2$ といふ形式に依つて因果的に表現せられるのである。言葉に依つて表現するならば、今或量の需要(N_1)に些少の變動が生ずると之に應じて價格が或は騰貴し或は低落する。然るに騰貴又は低落せる價格(P_1)は今度は逆に需要に影響を及して新しい需要の量(N_2)を生ぜしめる。斯くして互に反作用を及す過程を經て結局一定の平衡狀態に達するといふ關係に外ならぬ。(註一二)

註一二　平衡狀態とは吾々はシュムペーターに從つて次の如く定義するを得る「若し一個又は數個の經濟的數量の或一定の大さに對して、爾餘の數量の或一定の大さが、然かも唯一つきりの大さが屬するといふ關係に一切の經濟的數量が結び付いて居ることが判るならば、吾々は體系が一義的に決定せられて居ると言ふ。『屬する』といふのは此處では、一定して居らぬ方の數量の其大さが其自體を自ら造り出すことに努めること、且つ又、其大さが一度び生ずるや、更に其以上變化せんとする傾向が此體系の中に全然なくなつて仕舞ふといふことを意味する。吾々は此狀態を平衡狀態と呼ぶ」と。(Schumpeter; a. a. O. S. 28.)

其故に、若し或財の價格は何に依つて決定せらるゝやといふ質問に對しては、吾々は、縱令需要と價格の關係が函數的であることを認めて居つても尙、因果的に此際 N_1 であると答へて少しも誤つては居らぬ。而して其爲には特殊の假定を吾々は必要とせぬ。然るに單に與へられたる事實の相互依存關係を指摘するのみでは決して充分な說明とは受取れない。其函數的關係は如何なる理由に基くものであるか、其函數の性質又は構造は如何、換言すれば斯る函數的關係が依つて以て樹立せらるゝ所の原則は何であるかが重要な問題である。斯る原則を樹立せぬ限り、函數的認識は結局單なる個別的な事實的記述に止り、一般的法則の形式を備へることは出來ず、吾人の理解は全く表面のみを掠めるに過ぎぬものと爲る。函數的關係の根據を理解する爲には、即ち一般的法則としての其根本的必然性を之に與へる爲には、其故に、吾々は先驗的命題の形式の下に函數關係に基礎を與へる所の一定の假設を必要とするのである。此假設に於て、吾々は經濟現象を支配する所の因果關係又は函數關係の根本的基礎を確立する。それは又同時に經濟現象の特質を規定するものと爲る。此假說は說明を因果的に行ふが故に必要なのではなくして、理論的認識に一般的論理的妥當性を與へる爲に必要なのである。

四　目的概念と因果概念

因果概念が函數概念と相矛盾するものでないことは上述の通であるが目的論的觀察とも亦それは調和し得るものである。

經濟學の因果的觀察に反對して目的論的觀察の優越を說くものは既に古くから、シュタムラー、シュトルツマン、シュパン新しくはカレル・エングリッシュ等がある。

シュタムラーやシュトルツマンに在つては實證科學たる可き經濟學が規範的科學に改變される。斯くの如き意味の目的論的見地が理論經濟學に於て許容さる可きでないことは嘗て本誌に述べた所である。（註一三）

註一三　本誌第二六卷九號、拙稿參照

シュパンやエングリッシュに在つては其目的論は之と稍〻異り、經濟現象は規範的に觀察せられずして、機能的に說明せられる。發生論的因果的解釋は放棄せられ、之に代つて經濟現象一般に因果性を與へる所の機能概念が確立せられる。此後の意味に目的論を解するならば、それは正に因果論と兩立し得るものである。

經濟を一つの機能概念と考へることは限界效用學派の人々が經濟現象の因果的觀察を採るに當つて全く無意識的に想定して居つたことで、明白に之を提唱せるシュパンの功績は頗る尊敬すべきものである。

機能概念とは換言すれば目的――手段の關係である。之に從へば經濟現象は或目的の爲にする手段として解釋せられる。例へば人間は欲望滿足の爲に財貨を處分する。其際人間は自己自身の厚生の目的の下に行動する。欲望滿足手段は常に此目的達成の手段として觀察せられる。經濟とは斯る目的手段の關係を言表はすものに外ならぬ。

シュパンの全體主義的經濟學に在つては、目的は單なる個人的福利の追求に歸せしめられるのではなく、社會全體として完成といふことが最高の目的として置かれる。之を標準として重要性を異にする各種の目的が階段的に並べられ、下位の目的は上位の目的に對しては手段たる立場にあるものとして觀察される。

併し此處では經濟の機能概念の具體的內容に立入つて論ずる必要はあるまい。問題は限界效用說が卒直に主張して居る所の因果的法則は此意味の目的論的觀察と矛盾するものであるか何うかである。

單なる因果的發生論的說明が一般に排斥せられるのは、エングリッシュが適切に指摘せるが如く、斯る認識に在つては論理的確實性が欠けて居るからである。即ち若し限界效用學派が唯、單に個人の經驗的心理に訴へて、個人の評價行爲を經驗的事實にのみ基礎づかしめるならば、「共價値論の認識は經驗に依つて制限せられ、相對的なものとなり、總て各個人のそれ〴〵の現象が此經驗に順應せねばならぬか何うかは、決して絕對的確實性を以て斷言の出來ることではなくなる。或外的作用に對する人間の反應といふものは經驗的心理の事柄に屬する。併し、一定の場合に一定型式の反應を呈するからと言つて、外部的に相等しいあらゆる場合に同じ型式の反應が現れるといふ結論は生れて來ない。具體的消費の構造は心理的にも說明が出來るであらう。が併し、吾々は一つの絕對的に妥當性を具へた法則として之を樹立することは出來ぬ」（註一四）。

註一四　Englis, K.: Erkenntnistheoretische Kritik der österreichschen Wertlehre; Jahrbücher f. Nationalökonomie, 3. Folge. S. 3. Bd. 1933. S. 806.

理論經濟學の法則をして體系的ならしめ、論理的妥當性を之に與へる爲には、其故に斯くの如き發生論的法則のみでは不充分である。それは論理的法則の說明の補助手段としては確に有用であるが、それが其儘論理的法則として通用する譯には行かぬ。然らば之に形式的妥當性を與へるものは何であるか。それこそ即ち經濟の機能概念に外

ならぬ。限界效用學說に在つては、吾人はそれ〴〵の主觀的福利を念頭に於て、經濟行爲を實現するといふ機能概念の解釋はあらゆる個々の心理的經驗的現象に形式的確實性を與へる根本原理である。從來の限界效用論者は價格形成過程の心理的說明に餘りに熱心であつた爲め、屢、心理學派として非難せられる場合に遭遇したのである。

經濟の機能概念は規範的觀察を要求するものではない。規範的觀察は對象を存在するものとして說明しないで爲さる可きものとして價値判斷を下す。或一定の目的に到達せねばならぬものとして對象に指針を與へる。

之に反し機能概念は實證科學たる性質と毫も衝突するものでない。それは矢張り認識對象を存在するものとして觀察する。が併し同時に目的に對する手段として之を觀る。然も之は決して因果的說明を排斥するものではない。目的手段の關係は之を存在するものとして觀察すれば、即ち其目的が常に實現せられつゝあるものと考へるならば、他方に於て之は原因結果の關係として解釋し得られる。即ち人間の行爲の世界に於ては、其行爲は或目的を持つを常とする。其故に行爲は一つの機能、シュパンの言葉を借りるならば給付(Leistung)である。然るに其目的こそは斯く〳〵の行爲を爲すに至つた動機即ち原因と看做すことが出來る。行爲は其處で一定の原因の作用として實現せらるゝ所の結果に外ならぬ。其故に吾人は經濟現象の因果的關係を說明するに當つて、原因の概念の中に常に目的の味を包含させて考へることが大切である。斯く考へることに依つてのみ人間の行爲の世界に屬する社會現象の法則に論理的妥當性を賦與することが出來る。若しも之を怠る時は、因果的說明は經驗的な發生論的說明に終始し、理論經濟學上の法則たる性質を獲得することは出來ぬであらう。

シュパンは此事情を次の如く言表はして居る、「吾々は手段の概念の中に二つの論理的要素即ち肢體的、合目的的要素と原因的要素を見た。前者は第一次的、後者は二次的、發生論的なものである。經濟學の構成に於て吾々は、之に從つて唯肢體的(目的論的)概念即ち給付概念のみが包含せられるのを見る。原因的又は發生論的概念は單に補助概念たる役目を演ずるに過ぎぬ。」「經濟學の法則は給付の結合、又は給付の大さの結合に關する法則定立的概念である。經濟學上の法則は『一般概念』として、『法則定立的概念』として、自然科學的(因果的)法則と同樣に、形式論理的構造を備ふるものである」。(註一五)と。機能概念と規範的概念との區別に就ては次の如く述べて居る。

「手段の本質は正に一つの全體中の給付肢體としての合目的性である。併しながら經濟學は手段を其目的に照して批判吟味するものではない。經濟學は、究極目的が果して妥當すべきや否やとか、正當なる當爲を其中に包含するや否やとかに就て其究極目的を論ずるのでもなければ、將た又、……究極目的に向けられたる手段の內容的正當性とか或は又其眞の妥當性及び當爲性から觀たる手段とかを研究するものでもない。……經濟學は其故に決して內容的に判斷する所の目的論的科學ではなく、反つてそれは手段の妥當性と當爲性とを其時々に一定せるものとして、且つ又正しきものとして受取るが故に、それは唯手段の目的割當て——即ち吾々が曩に手段の給付と呼んだ所のもの——並に此給付及び給付の大さの順序段階に於ける妥當性關係のみを研究する」(註一六)と。

註一五　Spann; a. a. O. S. 258-259.

註一六　Spann; a. a. O. S. 260.

五　純粹經濟學

上節に於て吾々は理論經濟學に於て最近問題とされて居る所の函數概念及び機能概念に關し、一通りの所見を述べ、論理的要求としての假說の意義を力說し、以て理論經濟學としての限界效用說の取る可き方法論的態度を明にしたが、終りに尙ほ一つ效用說の取る立場に關し加へらる攻擊に關する辯明を述べて理論經濟學の意義を明確なら

しめやう。

其攻撃といふのは外でもない、限界效用說は過度に抽象的であり、現實の生活より遊離し、說明として役に立つて居らぬといふことである。經濟學は現代社會の經濟現象を說明することを目的とするものであり、從つて社會の種々なる構成要素に注意を拂ひ社會學的基礎を經濟理論に具へなければならぬと說くのである。

此問題に關しては、嘗て社會政策學會に依りて開催せられたる價値學說討論會に於てアルフレッド、アモンが此趣旨の質問に答へて爲した所の答辯が最も適切な解答であると信ずるから、それを此處に其儘紹介する。即ちアモンは同會の席上ツアイスル、コルム等の攻撃に答へて、限界效用說が所謂る純粹經濟學であることを說き、次の如く述べて居る。

「此點（限界效用說の價値論――筆者註）に關するコルム氏の議論は、決して目的に適ふものでない樣に見受けられる。吾々の價値論解釋や其說明に對してコルム氏が向けた所の議論の要點は、要するに、吾々の價値論が經濟の社會學的背景を注意して居らぬ、之を考慮に入れて居らぬ、從つて經濟をば其「全體」に於て、若しくは襄に述べた如く其「經驗的現實に於て」說明することが出來ぬといふに歸着する。此事は吾々は直ちに承認せねばならぬ。併しながら價値論が此事を成遂げるものであるとは未だ何人も主張したことはないし、又價値論自ら斯る目的を設定したことは無い。限界效用理論の目的は或制限されたものである。――この事は常に承認せられねばならぬ――が併し、それであるからと言つてそれは經濟現象に關する爾餘の何等かの認識目的と比較して重要性に於ても興味に於ても少しも劣るものでは無い。一體それが取扱ふ所のものは何であるかと言へば、それは、吾々の知る所の近代の國民經濟の交換經濟的現象をば個々の交換當事者の主觀的評價から說明し又は之に溯及させることである。之以上を超へる所のもの、――主觀的價値評價自體をば其背後に在つて之を條件付ける所の現象即ち社會學的背景は此種の現象に屬するものであるが、――其樣な現象から說明したり或は之に溯らしむることは其自體一個の問題、正に其自體頗る興味ある問題であり、科學の研究對象たる價値あるものである。がそれは最早や純粹經濟學理論の問題ではない。それは最早や其本質に於て經濟的なる現象を取扱ふものでなく、唯、猶ほ……經濟的に關係ある現象を取扱ふものであり、然もそれは特殊の觀察を必要とするものであり、一般的經濟學的理論の觀察方法から全く取除けらるゝ所のものである」（註一七）と。

註一七　Probleme der Wertlehre; Schriften des Verein f. Sozialpolitik, 183. Bd. 2. T. S. 120.

之に依つて明なる如く、純粹經濟學理論としての限界效用說に對し、其社會學的基礎付けなきの故を以て其抽象性非現實性を論難するのは、畢竟、純粹經濟學の任務に對する認識を缺き、限界效用說の眞意義を誤解するに基くものと言はねばならぬ。

六　效用概念

以上述べ來つた所に依つて限界效用說の方法論的態度は明白であると信ずる。吾々は次に該學說の內容を爲す所の價値論に關して反對派の人々の指摘して居る所の主要なる缺點を檢討し、效用說の發展を明にしたい。

限界效用說に關する價値論上の攻撃の主なるものは大體二つに之を大別することが出來る。其一つは外在的批判に屬するもので、效用說の根本概念と考へられる所の效用概念其物に關する攻撃である。即ち效用の概念をば現實に在り得ぬ所の一つの空想の產物又は虛構であると斷定する攻撃である。他の一つは內在的批判と言はる可きもので、效用說に依る說明の仕方に關する非難である。其非難の仕方は色々あるが其中でも最も代表的なものは效用說

は說明の當の目的たる價格をば豫め一定せるものと豫定して居るとなすもの、換言すれば效用說が匿證佯爭の誤を犯すもの、循環論法に陷れるものとなす攻擊である。以下之に就て論ずる。抑、外在的批判よりする效用說非難は立場の相違より生ずる當然の結論と見ることが出來るが、それは同時に效用概念に對する誤解から生ずるのが常である。

立場の相違より生ずる非難は不可避的なものである。此場合判斷の標準は何れの立場が最も能く認識目的に適合するかといふことである。立場の相違といふのは換言すれば對象を觀察する其觀察方法の相違に外ならぬ。方法の適否は目的に照し合せて決定せらる可きものである。目的に最も適するもの即ち理論經濟學の對象を最も能く說明し得る觀察方法が最も優れたる立場に立つものと言ふことが出來る。此方面に關しては吾々は嘗て、シュタムラーシュトルツマン又はディール等の社會的法的學派に關し、リーフマンの所謂る心理主義的觀察に關し、ミル、ディツェル、アモン等の個人主義的方法に關し、又ゴツトルの全體主義に關して本誌に述べたことがあるし（註一八）、又限界效用說の立場に就ては前節まで述べ來たつた所である。

註一八　三田學會雜誌、二六卷四號、九號、一〇號同二七卷五號、拙稿參照

其故に此處では立場の相違に就て再び論ずることをせぬ。吾々は唯、限界效用說に對する非難が如何なる誤解に基くものであるかといふことを指摘すれば足りる。

此意味に於ける效用說非難の中で最も一般的なものは本節の冒頭に述べた通り限界效用說に於ける效用概念なるものが現實に反するもの、空想的虛構に外ならざるものなること即ち之である。

效用概念が非現實的であるといふ見解は、樣々な形を取つて現れる。即ち效用とは人間の感情であり、之を計算することは困難であるのに、效用說の價値論は效用の計算を以て始ると爲すもの、效用の單位を決定する標準は效用說に於て任意に定められて居ると說くもの、或は又效用を以て全然空想の產物なりとし、效用說は假象を說く無內容な學說であると爲すもの等がある。

古くはノイマン、レキシス等があるが、新しくは全體主義の立場に立ち、あらゆる個々の經濟現象の有機的關聯を說く所のオットマル・シュパンの如きは、斯くの如き效用の反現實性を極力主張する尤なるものである。吾々は次にシュパンの攻擊に答へつゝ效用概念の眞意義を明白ならしめやう。

シュパン曰く「從來の價値並に價格の理論の如何なるものと雖も其任務を果すことが出來ぬのは決して遇然ではない。そのわけは或部分的な缺點に在るのでなく、……斯種學說の自ら設定する所の任務即ち明確なる價値並に價格の計算を理論的に說明するといふ任務が解決不可能であることに基くのである。此等の理論は總て明確なる經濟計算が一般的に存在するといふ誤つた假定の爲に救ひ得ぬ惱に苦しむのである。併し經濟は完全に計算の出來るものではない。實際上の經濟も亦從つて一個の經濟の存在する限り明確な價値並に價格の計算を成し遂げ得るものでなく又之を成し遂げたこともない。あらゆる計算的な價値並に價格學說の問題提出が誤謬でなければならぬ次第は此事實よりして當然推論せられる」（註一九）と。

註一九　Spann: Tote und lebendige Wirtschaft, 3.Aufl. S. 149-150. 全體主義者シュパン自身の立場からすれば上記の議論は確に首肯せられる。即ち彼は「交換」や「價格」を次の樣に解釋して居るのである「吾々の全體的立場から觀れば價格は個々の行爲及び評價の衝突の結果ではない。何故かといへば交換とは蠱に他の關係に於て論證した如く、國民經濟の諸段階及び諸生產部門の有機的結合の或一定方法に過ぎぬものだからである。それ故に『價格』とは又單に交換せられたる商品の數量關係丈けのものではなく、更に又其時々の單なる一定供給や其時々の一定需要に依存するものでもない。『價格』とは

即ち相接觸する國民經濟的段階並に生産部門の有機的結合現象の表現又は表示器である。然るに『表現』又は『表示器』とは或有意義なるものを内に含み、數量のみでは汲み盡し得ざるものである」(Spann; a. a. O. S. 157)と。

シュパンの全體主義其物の批判は曩に述べた所に從ひ此處では必要でない。問題は果して、シュパンの所謂る「從來の價値並に價格學說」がシュパンの考へる通り「明確なる價値並に價格計算を理論的に說明する」ことに失敗して居るか何うか」否な「此等の理論は明確なる經濟計算が一般的に存在する」といふ誤つた假定」を設けて居るか何うかといふことである。略言すればシュパンの「從來の價値並に價格學說」特に限界效用說非難は、果して誤解に基いて居らぬか何うかといふことである。吾人は此疑問を解く爲に、今暫く具體的說明に依るシュパンの攻擊を聞かう。

彼は「ゴッセンの法則が一般的に妥當性を備へた事實を指摘するものでない」(註二〇)ことを力說する。即ち曰く「財貨の數量が增加する時は一般的に效用が遞減するといふ、ゴッセンの法則の主張する所であると同時に又限界效用說の根幹となつた所のものは、正しくない。此法則は先づ第一に所謂る『結合的』目的(『欲望』)即ち「つ〳〵の目的が目的の全體の一肢體である場合に當嵌らぬ。――然も實に各目的はそれ〴〵根本に於て目的の全體の結合肢體に外ならぬ。唯、極端な生活狀態の場合、例へば荒地に於ける放浪者とか、大洋に漂ふ船頭の渴への樣な極く稀な場合にのみ僅かの間斯る結合が現れないことがある。それから又此法則は第二に享樂財（享樂給付、究極的目的達成）に非ざる財貨には當嵌らぬ。」(註二一)と。

註二一 Spann; a. a. O. S. 162.

斯樣な意味の下にシュパンは次の樣な例を擧げて居る。「例へば維納からセント・ペルテンに旅行せんとする人に取つては最初の一哩は十番目の一哩より效用がある樣なことはない。山岳に登つて眺望を享樂しやうとする人に取つては最初の一歩で無く、寧ろ反對に其人に自由な眺望を展開させる所の最後の一歩が最も大きな效用を持つものである」(註二二)と。同じ意味で其他散歩、讀書、觀劇、建築等何れの場合にも效用遞減の法則は當嵌らぬし、或一定の曲線も生れて來ぬ。從つて限界效用など〻いふものは存在せぬことに爲る。上記の例は結合的欲望、欲望の全體性に對してゴッセンの法則が當嵌らぬことを例示したものであるが、欲望の關聯に對しても、該法則が當嵌らぬ理由に就て次の意味のことを述べて居る。即ち砂漠の旅行者は十杯の水を以て充分に渴を醫したとすれば、より以上の水は效用を有せぬといふのがゴッセンの法則並にメンガー、ベーム・バヴェルクの敎へる所であるが、事實は左樣に簡單ではない。該旅行者は殘りの水に依つて食物の料理が出來る、洗濯が出來る、驢馬の飲料と爲すことが出來る。然る時は殘餘の水は第十杯目の飲料水より高い效用を認められるであらう。效用說の誤は渴を醫すといふ一つの欲望を孤立させて論じ財貨の數量單位を機械的に區別した點に在ると。(註二三)

註二二 註二三 Spann; a. a. O. S. 163-165.

上記の引用に依つて容易に斷定し得る如くシュパンの效用解釋は全く誤解に基き其非難は從つて的はづれである。ゴッセンの法則に於ても、メンガーやベーム・バヴェルクの所言に於ても、シュパンの所謂る欲望の結合又は關聯の所論に適する樣な效用の說明は少しも採られて居らぬ。登山の欲望にしろ、讀書の欲望にしろ、一つ〳〵の欲望であつて、ゴッセンの法則は或一つの山へ登ることゝ或一つの書を讀むことを一單位の欲望と看做すのであつて、斯る欲望は其充足を反復するに從ひ、登山の效用はそれ〴〵相違し、然かも遞減するのを原則とせるといふ意味である、他の條件にして「同一」なる限り「同一」の山に三度も四度も登る時は第三回目は二回目より、第四回目は三回目よ

り一層低い程度の欲望滿足を得るであらうといふことを指適するのである。一つの欲望充足の過程を分析し其道程の一部分は他の一部分より效用が多いとか少いとか論ずるの效用說を誤解するの甚しきもので、全く無意味に等しい。ゴッセンの法則を斯樣に解するのは、恰も該法則が一の食事の效用を論ずるに當つて、最初の一匙の飯は咽喉を通過する時の方が胃袋に在る時より效用が多いといふことを主張するものであると斷定するに等しい無理解に基くものである。

效用の關聯に關してシュパンの擧げた例も同樣である。ゴッセンの法則は、水が時々渴を醫する爲め、時々に料理の爲め又時に洗濯撒水其他種々なる用途に利用せられ得ることを無視して居るものでは決してない。否な斯る事情を考慮してこそゴッセンの法則は當嵌るのである。各經濟主體は自己の欲望滿足の爲に水を種々なる用途に利用する。若し砂漠旅行者が豐富な水を所有して居るならば、渴を醫する爲に之を殘らず用ひることをせぬであらう。或程度迄飲料水として使用したる後には或は料理の爲、或は驢馬の爲、或は洗濯の爲に其殘餘を利用するに相違ない。此際當該旅行者は其幸福を可及的大ならしめんとする願望から、與へられる水に依つて重要性の大なる欲望滿足を確保するに相違なく、重要性の劣れる水の用途が結局滿足されずに殘ることに爲るのである。效用遞減の法則とは正に斯る事情を指すものに外ならぬ。限界效用とは、此場合一單位の水の增加又は喪失に依つて該旅行者が附加又は放棄する所の效用を言ふのである。上の答に於て一單位の水といふが一單位とは如何にして定めらるゝかゞ疑問と爲るかも知れぬ。水とは限らず總て財貨の評價基準と爲る所の單位は如何にして定めらるゝかが問はれるかも知れぬ。

シュパンは僅か一日一立の水の增加は效用增加に爲らぬが、數百立の增加否な無限な水流の增加は或は浴用の水として新しき效用を生み、動力、電氣、製造の手段として偉大なる效用を造り出す效果あることを指摘し、效用說の任意な計量單位選擇の誤を說いて居る。果して此非難は正しいであらうか。

之も亦シュパンの誤解に基くものに外ならぬ。僅か少量の水しか與へられぬ旅行者の場合と日々の水を湧出しつゝある泉と無限の水流を有する川との場合では之に對して評價する評價の單位が全く異るのである、評價の單位が異れば限界單位の效用も亦當然相違して來る。多數の同樣の川の流れをとつて見れば水力電氣の效用は川の增大するに連れて遞減するであらう。同樣の泉が澤山あれば泉の供給する水の效用は遞減するに相違ない。(註二四)

註二四　此點に就てマルクス主義者の一人ブハリンも亦限界效用說に於て財評價の單位が相違するに連れて財の效用の異ることを不合理な偶然なるかの如く考へ、發達せる商品生產の社會に於ては斯る偶然は行はれぬと言ひ、次の如く述べて居る「リンネルを賣る生產者、それを賣買する卸商・數多の小賣商人――等は何れもメートル、センセメートル若しくは反(即ち幾メートルかを單位として採用せるもの)に依つて其商品を計量することが出來る。然も總ての此等の場合に於て評價には何等の相違も無い、彼等は其商品を手離す。(生產者や其他財の所持者が財を手離す正規定過程は販賣といふ近代的形式をとる)彼等に取つては販賣せらるゝ財貨が如何なる物理的尺度に依つて計算せらるゝかは全く無關係である。自己自身の爲に使用する所の購買者の動機の分析に於ても吾々は同樣な現象を觀る。事態は正に甚だ簡單である。今日の『經濟主體』は財を市場價格に基いて評價する。然るに市場價格は決して計量單位の選擇に依存して居らぬ」と。(Bucharin; Die politische Ökonomie des Rentners, II. Aufl. S. 83-84.)

併し、評價の單位が異なれば當該財貨の限界效用も自ら違つて來るといふと、限界效用說は任意に計量單位を選擇することに依つて如何にも不安定な假定の上に立つものゝ樣に感ぜられ、シュパンやブハリンの評言が正當視される如く見受けられるかも知れぬ。之に對して吾々は限界效用說に對して始て體系的基礎を與へたと言はれるべー

ム・バヴェルクの歴史的な論文の中に在る一節を引用して以て明快な解答と爲すことが出來る、即ち曰く

「かくする時は價値判斷は人間からあらゆる立脚點を奪つて全然任意に任されるものであるかの如き懸念が起るかも知れない。即ち大なる評價單位を選ぶか小なる評價單位を選ぶかに依つて財は放肆に價値を持つたり、持たなかつたりするかも知れないと。併し此懸念は根據のないものである。蓋し人間は評價單位を任意に選び得ない許りでなく、一般に或種の財貨に價値評價を下さねばならぬといふ外的事情は同時に如何なる量を價値評價の單位にすべきかに關しても全然自由意思には任されぬからである。假りに私が馬を一頭買はねばならぬとすれば、私の爲すべきことは、數百頭の馬、又は世界中の全部の馬が私に取つて何れ丈けの價値が在るかの判斷を下し、それに依つて私の買値を測定するのでなく、一頭の馬に關する價値判斷を下すべきことは云ふまでもないことである。かくの如く吾々は常に内部的強制に依つて實際の經濟的立場から必要な價値判斷を下すのである。」（註二三）と。

註二三　Böhm-Bawerk; Grundzüge der Theorie des wirtschaftlichen Güterwertes, Jahrb. f. Nationalök. u. Stat. 1886. S. 16. 長守善譯經濟的財價値の基礎理論（岩波文庫）三四―三五頁。

由是觀之、シュパンやブハリンの效用概念批判は全く誤つた解釋に基く非難であることが明であらう。シュパンの言ふ意味に於ける欲望の全體性や聯關性は正に限界效用說に於て考慮せられて居るものであり、其計量單位も亦各人に依つて任意に自由選擇せらるゝものゝ樣に效用說が觀察して居る譯ではない。

效用說は個々の具體的な場合から離れて一般的な本質を明にする爲めに、說明上の手段として抽象的な計量單位を想定し、限界效用の大小又は限界的欲望の强度を假に數字に表現し以て理論的明確を期するのである。嘗て限界效者論を說いた主要な一部の學者達、例へばベーム・バヴェルクやヴィーザーの如き人々は效用の比較測定が現實に數字的表現に類似する程の精確さを以て行はるゝものと考へ、爲に反對派の理論家から嚴しい批判を受けた。此批判が正當なもので在ること、併し限界效用の理論の爲には數量的精確さを以てる效用の測定が不必要であつて唯、單に其大小の比較の可能性のみで充分なる次第は以前本誌で論證した通りである。（註二五）

註二五　本誌二五卷九號價値學說無用論と限界效用理論參照。

さて、此處に於て當初の疑問「從來の理論は明確なる經濟計算が一般的に存在する」と假定して居るか何うかは自ら明瞭である。限界效用說は決して斯くの如き計算が一般的に存在するといふことを假定するものでは無い。限界效用說は唯、價格形成の過程をば各經濟主體の主觀的評價に訴へて說明せんと企てるものに過ぎぬ。其際種々の財貨の分量に對する主觀的評價を數字に依つて現すのは、效用の數量的表現が現實に可能であるからでは無く、唯、說明上の明確を望むからに外ならぬ。

限界效用學派の一分派と看做さるゝ所の所謂る數學派の經濟學は其故に、明確なる經濟計算が一般的に存在するといふ事實の上に築かれるものではなく、明確なる理論的說明の一表現手段として存在理由を有するものなのである。

即ち數理經濟學に於て用ひらるゝ所の數學又は記號は或物理的なる數量を表示するものではなく、或經濟的大さ換言すれば、一定單位量の財貨に伴へる主觀的欲望の相對的强度を表現するものである。而して此相對的な强度的大さが貨幣の流通する交換經濟の社會に於ては一定量の貨幣額の形態を取る限りに於て、それは單なる比喩上の便宜から想定せられたる虛構で無くなり、形式上表面的ではあるが現實上の數的存在と看做し得らるゝに至るのである。

從つて貨幣經濟の社會に於ては或量の貨幣額は確に現實に計算し得る性質を備へて居るものではあるが、併し或量の財に對する欲望の相對的强度を表現するものとして觀察せらるべきものであつて、單なる需要又は供給の量的表現としての貨幣量として解釋するのみに止まるのは不完全であり、又斯る解釋のみで充分と考へるのは誤りである。

需要、供給並に價格の函數的關係をば單なる量的な交互作用とのみ考へ、之に依つて價格形成の過程を一聯の方程式に表現するとすれば、吾々は、例へばグスタフ・カッセルの價格形成の方程式に於て見る如く、表面的な量的關聯としての價格形成を頗る簡單明瞭に了解することが出來る。が併し之は飽くまで表面的な、簡單明瞭な理解であつて、斯る量的關聯の背後には、之を基礎付ける所の事實が在り又量的觀念のみでは說明することの出來ぬ經驗的事實の潛んで居ることを知らねばならぬ。其故に數學的方法は其數字なり記號なりを以て或は量的大さ或は質的大さを表現するものとするにせよ、ワインベルガーの說く通り、「其觀察の基礎と爲る所の價値の函數的依存關係は豫め經驗的に確立せられたるものとして前提する」ものでなければならぬ。（註二六）

註二六　O. Weinberger: Mathematische Volkswirtschaftslehre, 1930. S. 9.

即ち數學的經濟學は數字又は記號なる獨特の明確な表現手段を利用することに依つて經濟現象の說明を助け、理解を容易ならしむる上に獨自の存在理由を有するものであつて、數學的方法に依らなければ研究不可能であるといふ意味に於ける研究方法としての存在理由は之を備へて居るものではない。數學的表現が複雜なる現象の明確な論理的關聯を表示する限りに於てそれが經濟現象の理解を少くし又研究の進步に貢獻し、其爲に言葉に依る表現では殆ど不可能と思はれる說明を爲すことが出來ることは正に數學派の功績として疑ひ無い所であるが、併しそれも亦畢竟するに表現方法としての其功績に歸せらる可きものである。此點に關しエワルド・シャムスの左の言は頗る適切である。

「數學的方法に對しては屢次の樣な抗議が開かれる、即ち數學的方法の適用は、理論的思考過程を豫め概念的に完成させて置くことを常に必要とし、然る後に初て記號的分析が起つて來るのであるから、數學的思惟は根本的に獨立の妥當性を要求することの出來るものでなく、常に先づ追加的な方式化であると。所で此見解は全く正しく且つ又數學者自身に依つても採用せられて居る。數學的方法の是認は確に此追加的方式化の效果に存するのである」（註二七）と。

註二七　E. Schams: Die Casselsche Gleichungen und die mathematische Wirtschaftstheorie; Jahrbücher f. Nationalökonomie u. Statistik. 127. Bd. 1927. S. 387.

由是觀之「效用」なる概念が現實に在り得ぬ性質を備へた一つの空想的產物なるかの如く考へるのは全く限界效用說を誤解するものであり、其非難も亦見當外れであることは明である。

以上の論證に據つて、吾々は限界效用說が其方法論的基礎に於て其論理的前提に於て、又其說の出發點たる效用概念に於て全く論理的誤謬を藏せざるものであると信ずる。

最後に吾々は效用說の反對者の大多數の人々が、指摘する所の其內在的缺陷、其論理的誤謬なるものを檢し、反對派の誤解又は無理解を明にすることに依つて以て限界效用說の基礎の確立に資したいと思ふ。

七　主觀的價値と價格

效用說の內在的缺陷と言はれる所のものは冀に記した通り主觀的價値と價格との間の循環論的說明の事である。

即ち限界效用說に依れば財貨の價格は各經濟主體の主觀的評價即ち限界效用に依つて決定せられるのであるが、限界效用は逆に當該財貨の價格に依つて決せられる。限界效用は豫め財貨の價格が定まつて居らなければ一定するものではない。それ故に限界效用が價格を定むといふのは匿證詳爭の誤を犯すもの、循環論法に陷るものであると考へられたのである。斯樣な攻擊を加へる代表的理論家として、吾々はシュトルツマン、ブハリン、オッペンハイマー等を擧げることが出來る。

先づ限界效用說の說く所を略述しやう。此學說は最初交換經濟的現象を考慮の外に置いて各經濟主體は其厚生目的よりして諸種の財貨の價値を如何に定めるかを說明する。其解答は當該經濟主體に取つての限界效用が其財の價値であるといふことであつた。此解答の論理は改めて此處に述べる必要はないであらう。それは效用說の出發點を承認する以上容易に推論せられる所であるし、又此際直接に關係のないものである。

財の價値（客觀的）は其限界效用に依つて定るといふ命題は、然るに發達せる交換取引の存在する社會に於ては簡單に承認する譯にはゆかない。即ち「交換取引はある種類の財を常に他の種類の財と置き代へることを可能ならしめるから、ある種類の財の喪失を他の種類に轉嫁することが出來る。財の一部の喪失を補充する爲に、同種の財の一部を比較重要でない用途から取つて來てそれを充たさないで置くといふ方法に依らずして、他の種類の財を、從來の使用計畫から引き離し、それと交換することに依つて必要な補充品を求めることが出來る。此場合に一種の財の喪失に依つて實際失くするものは、他の種類の代用財に依つて與へられる筈の效用である。且つ此代用財は比較的重要な用途から選び出されるのではなくて、それの用途の中で最も重要でない用途から引出されるものであるから、前の財の喪失は此代用財の限界效用に當相する。其故に此處では或種の財の限界效用と價値とは、他の種類の代用財の限界效用に依つて測定されるのである」（註二八）

註二八　Böhm-Bawerk; a. a. O. S. 岩波文庫版、六八―六九頁。

略言すれば各種財貨の交換が可能である場合には、一財の價値は、其直接の限界效用に依存するとは限らず、之と交換し得る他の或財の限界效用に依存することに爲る。然るに其爲には、喪失せる財貨と之と交換すべき代用財との交換比率が前以て判つて居ることが必要である。即ちそれ〴〵の財の價格が豫定されて居らねばならぬ。

ベーム・バヴェルクに從つて具體的な例を取れば、今或人が一着しか所持して居らなかつた冬服を喪失したと假定する。所が一組の冬服は其人の生命と健康とに影響する程の重大な效用を持つものである。所で交換の行はれる社會に於ては其人は從來他の用途に用ふべき筈であつた財を斷念して其代りに新しい洋服を購入することが出來る。此際其人は此犧牲にせんとする財をば其人に取つて最も重要でない用途から即ち其限界效用から取る、市場に於て新しい洋服を買入れるのに四〇フローリン掛るとすれば其人は買入れやうとして居る財の中最も限界效用の低いものを四〇フローリン丈け斷念する。其故に交換の存在する社會に於ては洋服の限界效用は其の直接の限界效用ではなくして交換に依つて代用し得る財の限界效用に依存することに爲る。其處で反對派の攻擊が起る、「四〇フローリン」といふ洋服の價値は何に依つて定まるのか、四〇フローリンが豫め判つて居るのだとすれば洋服の價値は其限界效用に從つて定まるのでなくて反對に洋服の價値が其限界效用を定めることに爲るではないか。又洋服を四〇フローリンで買はうとする決意には、同額の金額で他の如何なる財貨を幾何丈け購入し得るか豫め判つて居ることを必要とする筈ではないか。其故に效用說の論理は說明しやうとする當の目的を豫め定めて置くことに外ならぬではないかと。

限界效用說の、此循環論證的外觀は、上記の代用效用の理論許りでなく、更に一財が種々なる用途特に交換取引の爲にも利用せられる場合の說明にも生じて來る。即ち或財貨が唯、其使用者に依つて直接に利用せらゝ許りでなく、他の或財との交換にも利用の出來る場合には、該財の使用者は、之を評價するに當つて必しも其直接の限界效用を考へないのである。其を交換して獲得し得可き他の財貨の限界效用を考へ、其所有者の評價は何れか一層高い方の限界效用に依存するのである。例へば一般的に書籍商は其商品たる書籍をば其直接の使用價値に從つて評價することなく、それの、他財との交換能力、即ち其交換價値が該書籍商に取つて何れ丈けの效用を與へるかに從つて（主觀的交換價値に從つて）之を評價するのである。

其處で疑問が起る。交換取引の行はれない社會に於ては一財の價値は、其存在量の許す最底の效用に依つて定められるから問題はないが、交換の行はれる場合には財の交換能力如何が問題となり、主觀的交換價値が該財の使用價値より高い時には、該財の評價は其限界效用に依らないで其交換價値に依存することに爲る。之は代用效用の理論に於けると同樣に、說明の當の目的を豫め判つたものとして定めて置くことで無くて何であらうか。主觀的交換價値と雖も結局其財の客觀的交換價値が判つて後初めて定められる大さではないか。否な、其財許りではない、あらゆる他の財の交換價値が判つて居つてこそ、初めて主觀的交換價値は定まるものではないか。何故かと言へば、主觀交換價値即ち或財と交換さるべき財の限界效用を知る爲には、其或財の價値と、同時に之に比較せる爾餘一切の財の價格が判つて居ることが必要であるからである。（註二九）

註二九　シュトルヴァマンは次の樣に述べて居る「代用財、即ち新に購入せらるゝ衣服が市場に於て何れ丈けの價格を持つか又更に其人の經濟の中で犧牲に供せらるゝ財（犧牲に供せらるゝ奢侈財、家計支出、賣却され又は抵當に入られる所の世帶道具）は此際一着の冬洋服に對して如何なる價格關係に立つかといふことは此處では全然放置された儘に止まる。一方に於て此等財貨の價値（市場價値）と他方に於て冬洋服の價値とは個人に取つて客觀的に與へられて居る、評價する個人は兩方の價値の何れをも社會的事實として受取り、之に對して何等の影響を與へること無く、之に從つて計算を行ふ斯る場合に於て、當該個人に取つては所謂る主觀的交換價値即ち『提供せらるゝ所の財貨が其經濟主體の爲に市場に於て或對價物を受取る其能力』換言すれば『一財が、之と引換に他の財を供給する能力に依つて一定個人の厚生の爲に獲得する所の其重要性』が問題と爲る。――繰返して言へば――國民經濟的に觀察して――主觀的交換價値とは縱令ひ主觀的であるとはいへ、猶ほ先づ客觀的交換價値即ち市場價値を一定せるものとして前提するものであり、然も交換せられたる財の市場價値のみならず猶ほ又交換せらるゝ財の市場價値を前提とするものである。從つてそれは一つの無意味な中間概念である」と。（R. Stolzmann; Zweck in der Volkswirtschaft, 1909. S. 723-724.）

ブハリンは卒直に次の如く述べて居る「例へばベーム・バヴェルクは『四〇フローリンス』を何處から持つて來るか。然も五〇でも一〇〇でもなく正に四〇とは何故か。此場合ベーム・バヴェルクが單純に市場價格を與へられたるものとして前提して居るのは明である。賣買若しくは購買が必要な條件として前提せらるゝ限りそれと又同時に客觀的に一定せる價格も前提せられる。」……「かくてベーム・バヴェルクは吾々の主觀的價値評價に際して（謙遜にも大多數の場合に就てベームの認める如く）一つの客觀的な價値の大さが前提とせられて居ることを承認する。然るに彼の任務は主觀的價値評價から此價値の大さを導き出すことに在るのであるから、此著者の說明せる代用效用論は明に循環論證以外の何物でもない。即ち客觀的價値は主觀的價値に還元せられ、それはそれで客觀的價値に依つて說明せられる」と。（Bucharin; Die politische Ökonomie des Reutners S. 88）又ベーム・バヴェルクの主觀的交換價値の說明に就ては次の如く述べて居る「主觀的交換價値の量の定義そのものゝ內にこそ個人心理の砂上に打ち建てられた理論の潰滅が明に表れる」。（Bucharin; a. a. O. S. 101.）と。

オッペンハイマーは、貨幣に依る評價といふことが既に一般的に財貨の價格の判つて居る時にのみ可能であるといふ意味で效用說の循環論を離ずる。即ち曰く

「貨幣其物は決して『主觀的使用價値を持つて居らぬ。それは直接には如何なる種類の欲望を滿たすものでもなく、只守錢奴の妄想を滿すのみである。それは、滿足手段を供給するが故に、唯〻間接的にのみ欲望を滿たすことが出來る。それは唯〻他の直接に『有用なる』財貨即ち望ましき財貨を代表することが出來る。といふのは如何なる財貨であるか。明言するまでもなく、余が貨幣で購入し得る所の財貨である。欲望せる何んな財貨を、又その幾何を余は貨幣に依つて買ひ得るか。それは、余の貨幣貯藏額が一定して居るとすれば當該財貨の價格に依存する。貨幣は斯くの如く、それが余に取つて一定の望ましき財貨の一定數量を表示する限りに於てのみ『主觀的價値』を持つ。而して、それは唯〻余が財貨の價格を知る場合に在り得るのみである。

然るに價格なるものは『根本現象』の研究に依つて初めて演繹せらる可きものである（然る後に初めて、最も單純な場合即ち孤立的交換から、二・三の單純な場合を經て、現實的市場の交換の場合へと正しく進んで說明すべきである。然るに此處では斯く、先づ導出されねばならぬ筈の價格が前提せられて居る。即ち……論理的死罪に値するもの、匿證佯爭の誤である……」（F. Oppenheimer; System der Sociologie 3. Bd, 2. Hb. 5. Aufl. S. 802.）

上の註に述べた所のシュトルマン、ブハリン及びオペンハイマーの所論は一見如何にも正鵠を得たるが如く、正に效用說の根本的弱點を突けるもの〻如く思はれるかも知れぬ。確に吾々は、交換經濟の社會に於ては、交換に依つて新に、同一物の補充が出來る場合、又は同一財に就て種々なる用途特に交換に依る處分法を利有し得る場合には、當該財の交換價値は各經濟主體の主觀的評價に重大なる影響を與へるに相違ない。又一定額の貨幣に依つて評價する爲に吾々が貨幣の限界效用を知つて居らねばならねことも亦確である。然も或量の貨幣の所有者に取つて、貨幣の限界效用は唯一般物價が知られて居る場合にのみ漸く知られ得るのである。

斯樣な譯で、交換取引が存在し且つ交換謀介の手段として貨幣の流通する社會に於てはあらゆる經濟主體は、其賣買の對象とする所の財貨のみならず爾餘一般の財貨の價格を知つて居らなければ之を評價することの出來るものではない。此事實を指して效用說反對論者は何れも異口同音に其循環的論理の誤を指摘した。

之に對して限界效用說は如何なる說明を與へて居るのであるか。四〇フローリンの上衣の例と言ひ主觀的交換價値の理論と言ひ何れもベーム・バヴェルクの提出せる理論である、彼自ら之を循環論理と考へる筈はない。併し之は一見如何にも循環論理なるかの如く見受けられる。其故にベーム・バヴェルクは說明が循環論理の非難を蒙り易いものであることと知り、かゝる誤解を避けることに苦心して居るのである。然も其如何なる努力も反動論者を承服せしむるに至らなかつたもの〻如くである。吾人は反對論者の非難が誤解に基くものであり、ベーム・バヴェルクの說の正しきことを信ずるものである。近くはブハリンに對してレオ・ケッペルが、オッペンハイマーに對してはウォルヘルム・フロイゲルスが、又ルードウヰフヒミーゼス等がベームの所論に邁ひつゝ反對論を駁して居る。吾人は此等の效用論者の說を引證して以て效用說の所謂る致命的弱點も亦弱點に非ずして寧ろ其長所の一つである次第を說からうと思ふ。然も其說明は頗る簡單である。

一經濟主體が一財の喪失をば他の或代用財の補充に依つて償ひ得るといふ場合は、貨幣經濟の現實的形態に於ては當該主體が任意に財貨を購買し得るといふ場合に相當する。又一財が種々なる使途に充てられ得るといふ場合は同じく貨幣經濟の社會に於ては經濟主體が任意に財貨を賣却し得るといふ場合に相當する。而して斯樣に財貨の購買又は販賣の可能な場合には各經濟主體は當該財貨の直接の使用價値に從つて之を評價するのでなく其交換價値に

從つて評價するのを通例とする。――勿論其財の交換價値の方が其經濟主體に取つて、其財の賣却の場合には其使用價値より高い限界效用を有し、其購買の場合には使用價値より低い限界效用を有するものとする。然らざる限り財貨の交換取引は發生するものではない。――其故に財貨の交換が發生する爲には各經濟主體に豫め交換せらるゝ財貨の交換價値が想定せられて居らねばならぬ。否なゝ、特定財貨の交換價値許りではない。交換の可能性のある爾餘一般の財貨一切の交換價値の知られて居ることが必要であることは曩に述べた通りである。換言すれば各經濟主體はあらゆる財貨の交換價値を知つて後、即ち各自に取つての貨幣の限界效用を知つて後に初めて現實に交換取引を濟ませることが出來るのである。而して實際に各經濟主體は正に貨幣の限界效用を考慮しつゝ賣買を行つて居るのである。而して限界效用說も亦各經濟主體が各自、貨幣の限界效用を知つて居つて財貨の評價を爲し且つ交換を實行するといふことを明に主張するのである。

其處で問題は次の一點に歸着する。反對論者は貨幣の限界效用を豫め知られて居るものと爲す說明の仕方が循環論法であるといふ。效用論者は之に反對して循環論法ではないと主張する。其何れが正しいか。

吾人は效用說の正しさを信ずる。否なそれ許りではない效用說は反つて之に依つて一層現實に則した至極尤もな說明を加へるものであると考へる。

抑〻循環論證といふのは或前提の下に結論が與へられるといふ說明に於て、同時に其前提も亦結論に依つて與へられること、略言すれば論證せらる可きことを論證の根據となす說明の仕方であるが、效用說は決して斯樣な論點竊取を犯すものではない。

效用說は確に各經濟主體に取つて貨幣の限界效用が知られて居ることを前提として居る。貨幣の限界效用が知られる爲には各主體の所有する貨幣額と一般財貨の價格とが知られて居ることが必要である。之も亦效用說の明に承認する所である。各主體の所有する貨幣額即ち其財產狀態が豫め知られて居る、又は一定して居ると爲す假定は吾人に取つて其出發點に於て當然許さる可きものであつて此處で問題とするには當らぬ。疑はれて居るのは、一般財貨の價格が知られて居ると爲す想定である。吾人の見る所に據れば此想定は決して循環論證を惹起するものではない。各經濟主體が評價の基準として一般財貨の價格に依據するといふ場合、その依據する價格とは既に嘗て市場に存在した價格、經濟主體の經驗に屬する所の過去の交換價値なのであつて、其評價に依つて將に定められんとする所の價格では無いのである。然かも既往の經驗に屬する所の價格が絕對的に將來の價格を支配するといふことは在り得ぬのであつて、各經濟主體は唯〻過去の經驗に依り、將來の價格に對して想像上の價格を附するのである。此想像上の價格が現實に市場に於て成立する所の價格と一致するものであるか何うかは、其時々の需要供給の關係に依存するものであつて、決して豫め定まつて居る譯ではない。前以て知られて居る價格が各主體の評價に對し影響を與へ從つて新に成立する價格に對しても亦影響を及すといふことは確である。之は市場に於て現實に行はれて居る所の事實であり、又限界效用說の說明する所でもあるが、併し前以て知られて居る價格を參考にせる各主體の想像上の價格が其儘市場に於て成立する價格であると考へるのは誤も甚しいと云はねばならぬ。斯樣に誤解してこそ初めて效用說は循環論證の誤を犯すものだといふ非難が生れて來るのである。Aを決定するものはBであり、其同じBを決定するものはAであるといふのなら循環論證に爲るが、效用說の說く所は上の樣なA―B―Aの關係でなくA―B―A′―の關係なのである。各經濟主體が想定する所の價格、即ち主觀的交換價値Bは經濟上の價格Aに依つて影響を受けるが、其Bに依つて影響を受けるのはAでなくして、市場に於て之より成立せんとする所の價格Aなの

である。

唯、現實の市場に於ては、需要の側に於ても將た又供給の側に於ても過去から將來に渡る間に、突然の變動が發生すること尠く、大體過去に於て價格決定に參加した事情が其儘繼續することが普通なので、Bに依つて決定せられるA′がBを決定するAに等しい外觀を呈するのである。其爲に經濟主體が主觀的交換價値に依據して評價を行ふといふことは循環的色彩を表すに過ぎない。新に形成せらるゝ所の價格は縱令ひ同じ大さのものであつても其原因を異にして居るのである。

吾々の豫想上の價値評價が決して絶對的に將來の價格を支配するものでない次第は、吾々が日常經驗する通りである。ベーム・バヴェルクの言ふ通り「……市場に於ては現實の前に此豫想は吹き飛ばされて、尙も吾々の行爲の指針たらんとする一切の要求を失つて仕舞ふ。しかも猶ほ且つ此豫想に從はんと欲する者、換言すれば如何なる犧牲を拂ふとも自己の最初の見解に基いて、價格構成が彼の眼前で一變しても、初めの豫想を出發點として行動せんと欲する者は恰も、明日は雨天だとの先入觀から、其翌日靑空が彼の頭上で微笑んでゐるにも拘らず、雨傘を擴げて歩き廻る人と同じ愚を犯すものである。實際に於ては人間は斯樣な態度を取ることなく、上述せる如き主觀的價値評價は、市場に於ける彼の實際的態度の上に必要な商品を一定の價格、例へば四〇フローリンで購ひ得るとの一般的希望以外には何等の影響を與へない。此價格でそれが獲られゝば勿論結構であるが、得られなければ、彼はそれにも拘らず拱手して直ちに歸ることなく、現實に依つて裏切られた希望を棄てゝ彼の他の事情に基いて幾分高値を附けるべきか否かを熟考するのである」（註三〇）と。

註三〇　Böhm-Bawerk; a. a. O. S. 岩波文庫版一九九頁。

之を要するに吾々の豫想上の價格といふものは暫定的、假定的性質を帶びて居るものであつて、決して價値評價の究極の基準を爲るものではない。究極の基準を與へるものは結局其財貨の直接の限界效用である。若し四〇フローリンに依つて上衣を購入することが出來ぬとしても、其人は其購入を全然斷念することなく寧ろ、上衣の直接の限界效用の範圍内に在る如何なる價格にも同意するに相違ないのである。

フロイゲルスは此點に關するオッペンハイマーの質問に對して次の如く答へて居る「若しベームが、價格を生み出す所の價値評價をば、それはそれで更に價格に依存せる所の價値評價其物に實際に歸着せしめて居るとすれば、其場合には確に價格形成の說明に循環が在るであらう。然るに、貨幣を其交換價値に從つて評價すること、換言すれば人が貨幣に依つて購入し得ると信ずる所の財貨に從つて、即ち想像上の價格に從つて貨幣を評價することは決して究極的なものではない。實際に於て吾々は斯樣な、吾々の從來の價格經驗に從つて構成せられた想像の上に徹頭徹尾信賴し得るものである。が併し其想像又は其想像の上に建てられる所の評價は唯一時的なものであつて、吾々の希望價格の究極の基準を爲すものではない。究極の決定を與へるものは獲得せらるゝ財貨の直接の限界效用に相當する所の評價である。唯、實際に於ては、想像上の價格の上に立てられた評價を强ひて乘越べさせられる樣な場合が頗る少いので、其爲めに、價格に其自體歸着せしめられる所の評價が決定的である樣に見えるのである。」（註三一）と。

註三一　Vleugels; Das Ende der Grenznutzen-theorie? 1925. S. 81.

同樣の解答をば、ケッペルも亦ブハリンの攻擊に對して與へて居る。即ち曰く「既存の價格から出發することは本來の價格決定原因に非ざる假定的な價値評價以外のものを意味せぬ。二、處分し得る貨幣額から出發することは實際上、限定

された貨幣存在量の最終の貨幣單位が齎す所の限界效用に依據することを意味する。三――」。又ミーゼスの貨幣論を參照しつゝ次の如く述べて居る『平常時に於て、市場價格が經濟主體の價値評價に――無二のではないが――或著しい影響を及すことの根據は、市場價格が相對的安定を示して居る點にあるのであり、而して此相對的安定の原因は、價格決定根據の相對的安定に在るのである。其故に昨日の價格に結び付けることは實際的には誤りではない。何故かと言へば「人間の欲望と此欲望を充たす財貨の有用性に關する人間の見解とは、恰度人間の所有する財貨量並に所得の社會的分配と同樣に突然の決定的な變化を殆ど蒙ることの無いものであるからである。今日の市場價格が通例昨日の市場價格と著しく相異せぬといふ譯は、昨日の價格を作り上げた所の事情が一夜を經ても何等本質的な變化を蒙ることなく、從つて今日の價格が殆ど昨日のと同一の構成要素から出來上つて居るといふことに在る。若し市場に於て毎日の樣に迅速突然の價格變動が在るとすれば、客觀的交換價値の概念は、それが消費者の經濟計畫に於ても將た又生産者の企業計畫に於ても實際に於て備へて居る所のかの重要性を獲得し得ぬであらう』。（L. Miss; Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. S. 89.）」と）。

（L. Köppel; Grenznutzentheorie und Marxismus 1930. S. 15.）

之を要するに、循環論證の非難を放つものは效用說の說明が既往の市場價格――之に著しく影響せらるゝ經濟主體の評價――形成せらるゝ市場價格といふ關係を指摘するものであることを正視しないで、單純に市場價格――評價――市場價格といふ說明の仕方であると斷定して仕舞つた所に誤があるのである。

由是觀之、各經濟主體がそれ〴〵一定の貨幣の限界效用を想定して以て交換取引に從事するといふ假定は效用說に於て決して論理的矛盾を惹起せぬ許りではなく、寧ろ反つて現實に頗る適合せる假定である。實に以て效用說の正しさを裏書する一證左たるを得るものである。

限界效用說に對する價値論上の主なる批判は、上記の效用概念の虛構及び價値の循環論證に關するものゝ外價値論を無用と考へる者、及び費用の說明に失敗せりと說く者等が居るが、此等に就ては嘗て幾度か本誌に論じた所であるから、今茲に效用說擁護の論文を一應終結するに當つて再言するの必要はあるまい。（九・六・一五）